View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

# 佐藤忠良と絵本創作
## —名作誕生の背景と工夫されたイラストレーション—

藤　本　朝　巳

（筆者は、児童図書出版社、福音館書店の編集者であった松居 直氏から、1999年より12年以上に渡って聞き取りを行っている。その内容は、氏の生い立ちから教育歴、また編集者になるまでの軌跡、そして編集者になった後、月刊絵本「こどものとも」を刊行することに至った経緯、「こどものとも」（第1～第149号）の1冊1冊の制作意図や過程について、その後さらに、翻訳絵本のはじまり、国内・海外の児童図書関係の人物との交流などをていねいに聞き取っている。松居氏は現在、86歳になられるが、現在も子どもの本について、数々の講演をなさり、また文章を執筆しておられ、筆者は今なお、子ども本の文体について話し合いを重ねている。この間、瀬田貞二や石井桃子らの児童図書に関する姿勢や考えも、松居氏から直接伺うことができた。なによりも興味深かったことは、「こどものとも」制作の過程で、松居氏が出会った数々の作家、画家との交流の内実であった。

ところで、松居氏との出会いから、多くの児童図書作家や画家が輩出していることは周知のことであるが、氏は、幾多の絵本作家を発掘し、育て、世に送り出した編集者である。代表的な作家、翻訳者、再話者たちは、石井桃子、内田莉莎子、大塚勇三、木島 始、君島久子、瀬田貞二、鈴木三重吉、中川李枝子、浜田広介、平野 直、与田準一、渡辺茂男などである。また代表的な画家は、赤羽末吉、秋野不矩、朝倉 攝、安野光雅、大田大八、小野かおる、山脇百合子、加古里子、佐藤忠良、瀬川康男、田島征三、長 新太、中野弘隆、初山 滋、堀内誠一、丸木位里、茂田井武、藪内正幸、山田三郎、山本忠敬、横内 襄などである。（詳しくは註1を参照）[1] これらの聞き取りの内容は50本以上のテープやCDに収録されているが、近い将来、順次5冊の本（シリーズ「松居 直の世界」）になる予定である。その第1冊目はすでに発行された。[2]

本稿は、聞き取りをした内容から触発を受け、またその事実を手がかりに、筆者が独自の調査を重ね、まとめ、執筆したものである。もちろん、本論考に掲載

した画家佐藤忠良についての情報は、筆者自身が時間をかけて調査したものであり、佐藤の絵本創りについても、筆者自身の読み取りと解釈に基づいている。しかし、内容をこのような形にして文章化することができたのは、なによりも松居氏の長年の経験や知識から学ばせていただいたからであり、ここに深く謝辞を述べ、記しておきたい。)

## はじめに

１人の作家の人生とその作家の作品には、深いつながりがある場合がある。それゆえ、作家・作品を研究するには、時にその芸術家が誕生するまでの経緯をていねいに見ていく必要がある。というのも、１冊の作品が生まれる背景にはさまざまな出来事があり、意外な事実が隠されていることを知って、驚かされることがあるからである。

さて、日本の代表的彫刻家であった佐藤忠良[3]は、絵本『おおきなかぶ』(図１)でもよく知られている。しかし、彼が『おおきなかぶ』出版の３年前に、『やまなしもぎ』(図２)という作品を出していることはあまり知られていない。筆者は、この作品こそ、佐藤忠良が絵本作家として誕生するために、なくてはならない作品であったと思っている。

『おおきなかぶ』表紙　図１

『やまなしもぎ』表紙　図２

この論考では、佐藤忠良が絵本を描くことになった理由を明らかにしたい。そ

こで、出版までの事実を時系列に追いながら、彼が、何故この作品を描く必要があったのか、その要因となったと思われる出来事のいくつかを挙げて検証したい。また佐藤が、当時の出版事情のさまざまな制約の中で、深い思い入れのあったであろうこの昔話を、いかに縦長の紙面や自然描写にふさわしい色彩などを工夫して、巧みに描き上げたかも論じてみたい。

## 佐藤忠良の生い立ち

絵本『やまなしもぎ』(「こどものとも」42号)を描いた佐藤忠良は、日本を代表する彫刻家であった。そして、この類稀なる彫刻家の人とその作品については、すでにさまざまな本に紹介されているので、私たちは彼の人生も作品の特質も詳細に知ることができる。[4] 一方、佐藤の生涯が苦労の連続であったことも周知の事実である。すなわち、彼は幼くして(6歳)、父親を亡くし、貧しい家庭で育てられ、少年のころから苦労の多い毎日であった。また貧困の中、学生時代は書生のような生活をして学んでいたという。その後、18歳ころから油彩を独学で描き始め、画才が認められるようになる。20歳を過ぎてから、彫刻家を志すようになり、東京美術学校(現 東京藝術大学)に入学、美大生として学び始める。1939年(昭和14年)、佐藤が27歳の時に、美校の仲間と開いていた研究会が思想問題で取り調べを受け、練馬の警察署に留置されている。

その後、東京美術学校を無事に卒業し、結婚し、2人の子どもをもうけている。ところが、1944年(昭和19年)、32歳の時に召集され、満州に渡り、激戦地(ソ連国境近くの東寧)に送り込まれた。それでも、なんとか生き長らえて敗戦を迎えるが、敗戦後そのまま3年間もシベリア・イルクーツク州タイシェットの収容所に抑留されている。収容されていた年月、現地では重労働を強いられている。そして、まわりの人々が次々と倒れ亡くなったものの、佐藤は何とか生き長らえて帰国する。1948年(昭和23年)、佐藤36歳の時である。以上のことは、佐藤自身も書いているので、多くの方々の知るところである。

## 名作誕生の背景と巡り合わせ

今回、筆者が作品『やまなしもぎ』について執筆するため、佐藤に関して調べていた時、意外な事実を知った。この作品が出版されたのは、1959年(昭和34年)、佐藤が47歳の時である。佐藤は98歳にして他界しているので、ちょうど人生の半ばにして絵本を手がけ始めたことになる。さて、彼にとって重要な出来事であったと思われるが、『やまなしもぎ』出版の前の年に母親の幸さんが天に召されている。女手1人で2人の息子を育ててくれた母親に対し、佐藤は特別な思いを持っていたはずである。

この昔話「やまなしもぎ」は、母親と子どもだけの家庭（3人兄弟で、父親不在）が舞台となっており、子どもたちが病気の母親の病気を直すといわれる「やまなし」を探しに行く物語である。この物語を読んだ時、佐藤には深い思い入れがあったに違いない。物語では、太郎、二郎、三郎と、3人の息子が登場するが、上の2人は順次、山奥にやまなしを探しに行って、それぞれ沼の主（魔物）にげろりと飲み込まれてしまう。2人の子どもが出かけて行って、帰って来ない、という状況を母親はどのように思ったであろう。しかも、その後、3番目（末っ子）の三郎まで出かけてしまう。もちろん、この物語は冒険に出る子どもたちを中心に描かれているので、読者としては子どもたちに関心がいきがちであるが、視点を変えていえば、子どもを持つ親の気持ちを思い知らされる物語でもあるといえよう。

さて、佐藤忠良が戦争に赴き、シベリアに抑留されたことは先に述べたが、佐藤には4つ違いの弟（忠行）がいる。そしてこの弟は大戦中、中国に渡り、当時の南満州鉄道の仕事をなさっていたようだが、驚くべきことには、兄忠良と同じように、忠行も昭和19年に現地招集の補充兵として兵役についている。そして、戦後、兄と同じようにイルツーツクのアバカンという収容所に入れられていたそうである。幸い、弟、忠行は昭和22年に一足さきに帰還している。

しかし、2人の息子が2人とも戦争に招集され、しかも2人とも遠い外国の地で抑留されていた事実を知って、私たちは、息子たちを戦争に取られた母親の思いはいかばかりであったことだろうと思わされる。佐藤自身も当時を思い出して、以下のように記している。「日本中の母がそうだったのだろうが、子供を2人と

もシベリアへやられ、生死もわからず待つ母の思いは、気丈であった分だけ並みでない切なさだったに違いない。」

昔話「やまなしもぎ」は、息子たちが山に行って帰って来ない物語である。しかも、それは母親の側からいえば、自分のために妙薬を探しに険しい山奥に入る話であり、長い間、子どもの帰還を待つ親を語った物語なのである。佐藤は、この物語にイラストレーションをつけることになるが、編集者、松居 直は、前年に佐藤の母親幸さんが亡くなったことも、弟の忠行もシベリアに抑留された経験があることも知らずにイラストを描いて下さるように依頼したそうである。佐藤は、そういう事情を一言も語らず、この絵本を描くことを承諾し、黙々と仕上げたのであった。そして、この作品が、佐藤の「こどものとも」の第1作となり、やがて、名作『おおきなかぶ』(1962年)『ゆきむすめ』(1963年)出版と続くことになったのである。

昔話「やまなしもぎ」にイラストを描く画家を選ぶに際して、松居は直感的に佐藤忠良を選んだのである。この経緯を思うと、その物語にふさわしい画家を選ぶ、編集者松居の眼力の鋭さを思い知らされる。名編集者松居が数々の作家を発掘し、また探し出し、大切に、時に厳しく育て世に送り出したことは多くの方の知るところである。この時も、当時すでに彫刻家として名声を得ていた佐藤忠良に絵本を描くことを依頼した背景には、以上のような不思議な巡り合わせと編集者の人を見抜く確かな目があったことは、日本の読者によって、まことに幸いなことであったといえよう。松居は、この仕事については「佐藤忠良先生とお仕事ができましたから、それはとても大きな収穫だった。」と述懐している。

## 昔話の収集と出版

絵本『やまなしもぎ』は1959年9月、「こどものとも」42号として刊行された。この絵本は日本の昔話を題材にした絵本である。「こどものとも」シリーズでは、この作品が出版されるまでに、すでに昔話絵本が7冊出版されている[5]が、そのうち、日本の昔話を描いたものは4冊であり、この絵本は5冊目となる。「こどものとも」は内容も表現手法も多彩な絵本が続出するが、昔話絵本は重要な位置を占めている。

さて、昔話「山梨もぎ」は、昔話集『すねこ・たんぽこ』(平野 直編、1958年)[6]という昔話集から採られている。平野 直[7]は昔話の収集者として貴重な働きをした人物であるが、この昔話集の冒頭に「採集覚書」として、以下のように記している。

今は、ムカシコなど語る人も殆どなくなり、また童たちは世の粗雑な読物に災いされて、きこうともしない。きく興味のないところに、語り手の忘失があるのだ。かつての昔話の温床といわれた岩手にして、そうなのである。この機会に、われらの祖先が、語り継ぎ、語り受けてきた古い民族の伝承を、再現して見るのも、あながち無駄ではないと私は思っている。岩手の昔話で採集され、上梓されたものだけでも今は十指を数えるほどになっている。これらはすべて、分類もなにもなされていない。いわば生のままの素材である。(平野　17ページ)

以上の文章は、昔話が、当時すでに日本でも廃れつつあった事実を述べているし、また語り手が少なくなり、当然の結果として昔話を聞く機会も少なくなっている状況を示している。しかも平野は、ここに、採集された話がまだきちんと分類されていない当時の状態も伝えている。このような状況にあった時期(1943年)から15年後に、昔話集『すねこ・たんぽこ』が未来社から出版され(1958年)、その翌年に「こどものとも」が、この興味深い話を絵本として出版し、子どもと家庭に送り届けたことは意義あることであったといえよう。

## 昔話「山梨もぎ」

「山梨もぎ」は、AT551[8]として分類されている昔話である。この話は、分類表には、Supernatural Helpers(超自然の援助者たち)という項目に、The Water of Life(命の水　551)として記されている。類話として、ドイツ、ロシア、スペインなどに同種の話があることが記してあり、一般的には「父のために妙薬を探しに行く息子たち」と登録されている話である。他国の話の例を挙げれば、イギリスではジョゼフ・ジェイコブズが『続　イギリスの昔話集』に、よく似た話を記録している。[9]

さて、「山梨もぎ」は「末っ子成功型」の物語である。すなわち、この種の話では、通常、上の２人（長男・次男）が先に順次出かけ、それぞれ失敗し、最後に、最初は愚かであるとか、力がないといわれていた末っ子が出かけていき、難題を解決する。この話は、まさに小さい者が大きくて強い者に勝利する、その逆転の展開に魅力があり、また小さい子どもは、非力な主人公に自己移入しやすいので、子どもにも大変好まれる話である。昔話の研究者は、このような話を「最後部優先」型と呼称している。つまり、はじめは最後部にいた主人公が、最もむずかしい課題を達成し、最後は、例えば、最も美しい王女と結ばれるというような大逆転で物語が終わるのである。

「山梨もぎ」の構造を簡単に述べると以下のようになろう。昔話ははじめに「困った状態」があって、最後に、その「困った状態が解決する」ことで終わるものが多いが、この話も、はじめに母親が病気（困った状態）で、山梨を食べたいというので、３人兄弟が１人ずつ、順番に山梨を取りに出かけていく（課題）のだが、上の２人は、途中で、困っている老人（実は援助者）を助けてやらず、また老人の忠告に耳を傾けず、沼の主に呑み込まれてしまう。結果的に山梨を手に入れることができない（課題を達成できない）。最後に末っ子が出かけていくが、困っている老人を助け、忠告を授けられ、見事に魔物を倒す。しかも、上の２人の兄弟も助け出し、連れだって山梨を持ち帰り（課題の達成）、母親に食べさせると、病気はたちまち直り（困った状態が解消）、幸せな結末を迎える。構造を図示すると、以下のようになろう。

困った状態　母親が病気
　課題　母親に妙薬やまなしを持ちかえること
　　上の２人　課題不達成
　　末っ子　　課題達成　母親にやまなしを与える
困った状態が解消　母親の病気、治る

この間に、兄弟は、いわゆる昔話でいうところの「試験」を受ける。つまり、旅の途上で困っている老人を助けるかどうか、を試されるのである。上の２人は先を急ぐあまり、困っている老人を助けてやろうとせず、また素直にアドバイス

を聞くこともできず、後にひかえている戦いの道具を与えてもらえない。そして、課題を果たせない。ところが、末っ子は、いつも小さくて劣っていると人に見下されているせいか、困っている人の心情をよくわかっている（弱い者を労わる心をそなえている）ので、立場的に弱い老人を助け、忠告も素直に受け、結果的に山梨を手に入れる（課題を達成できる）のである。

## 「山梨もぎ」の文体

絵本『やまなしもぎ』の文章が、どのように作られているかを知るために、昔話「山梨もぎ」（すねこ・たんぽこ＝稗貫）の文体と、絵本『やまなしもぎ』の文体を比べてみて、以下のようなことが明らかになった。まず、単純に字数だけを比べると、昔話「山梨もぎ」は1537字、絵本のほうは1940字になっている。絵本にするのだから、字数が短くなっているか、というとそうではなく、むしろ多くなっている。その主な理由は、

1．「漢字」を「かな」に開いていること。
2．子どもに分かりやすくするため、必要と思われる箇所に、
　1）「必要なことば」
　2）「主語」
　などを追加したり、補ったりしていること。
3．子どもに分かりやすいように、難しいことばを易しいことばに直している。

などが挙げられる。

また、子どもが自分でも読みやすいように配慮して、いわゆる

4．地の文を「　」に入れて会話文にしている。
5．「分かち書き」にしている。
6．句読点を適切に追加して、必要な箇所に入れている。
7．指示代名詞を具体的な名詞にしている。

こうした書き換えは、元の文体を子ども向けに再話したということができる。こうして、絵本化するために、全体的にテキストの量が多くなっている。他にも、地方言葉を、いわゆる標準的なことば使いにしたこともテキストを長くした原因である。幼い子ども向けに語るには、こうした書き直しとしての再話は必要であり、この絵本は、その再話を的確に行っているといえよう。

しかし、このテキストが絵本として完全であるとはいえない部分もある。すなわち、「こどものとも」が、まだ縦版、縦組みであったため、縦長の紙面に文字を窮屈に配置せざるを得ず、読みにくいところがあるのは残念である。この難点が解消されるのは、横版、活字の横組みがなされる（1962年、4月号）ようになってからである。

上記の例を、最初の部分を例にして具体的に示したのが、以下である。

| 山梨もぎ(すねこ・たんぽこ＝稗貫) | 絵本『やまなしもぎ』の文体 |
|---|---|
| あるところにお母さんな人と、兄弟3人がありました。お母さんがあんばいが悪くて(病気で)寝ていて、山梨が食いたいといいました。そうすると、1番目の太郎が、「それでは山梨とりに行ってきます」といって出かけました。 | むかし、あるところに、<br>おかあさん 発端句として必要な言葉を追加している<br>3にんの きょうだいが 漢字をかなに開いている<br>すんでいました。おかあ<br>さんは、からだの ぐあい<br>が わるくて、ねて やさしいことばに変えている<br>いましたが、あるとき、<br>「やまなしが たべたい<br>ものだ。」と、いいました。<br>「それでは やまなし<br>もぎに いってきます。」 分かち書きにしている<br>といって、いちばんめの<br>たろうが でかけて<br>ゆきました。 |
| 行くが行くが山の中さ這入って行くと、大きな岩の上に婆さまがいて「どこさ行く」と、ききま | たろうが、やまのなかを 主語を補っている<br>どんどん ゆくと、<br>おおきな いわの うえに、 読点を補っている |

| | |
|---|---|
| した。それで「山梨もぎさ行くます」というとそんだらば、まっかみち(3本の枝路)になっているところに、笹葉コが3本立っている。それが「行けちゃガサガサ」「行くなっちゃガサガサ」というから、行けちゃガサガサという方さ入ってけと教えてくれた。 | ばあさまが　いて、<br>「どこさ　ゆく。」と、<br>ききました。たろうが　主語を補っている<br>「やまなしもぎに<br>ゆきます。」というと<br>ばあさまは、<br>「それならば、このさきの、　地方言葉を標準的な<br>3ぼんの　わかれみちに　ことばに直している<br>なっている　ところに、<br>ささが　3ぼん　たって　地の文を会話文にしている<br>いる。その　ささが、　指示代名詞を具体的な名詞に<br>「ゆけっちゃ　かさかさ」<br>「ゆくなっちゃ　がさがさ」<br>というから、「ゆけっちゃ<br>かさかさ」という　ほうへ<br>はいってゆけよ。」と、<br>おしえてくれました。 |

## 工夫されたイラストレーション

「やまなしもぎ」のイラストレーションは、いわゆる童画調である。佐藤の次の作品『おおきなかぶ』が立体的で力強く、迫力があるのに比べると、平面的で穏やかで、さわやかである。しかし、この絵本の絵には不思議な魅力がある。それは何故であろうか。

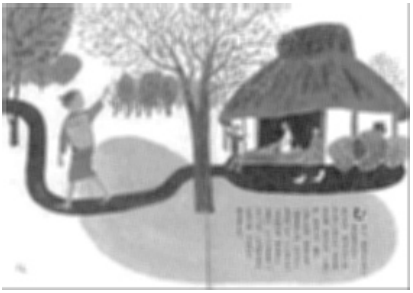
第1に、色合いの美しさが挙げられる。佐藤の描く絵本の色合いは独特の美しさがある。もちろん、彫刻家で絵本画家である作家は他の国にもいて、例えば、アメリカの彫刻家、クリス・ヴァン・オールズバーグ（Chris Van Allsburg, 1949 －）[10]は優れた絵本作家としても知られている。オールズバーグは彫刻家であるから、形態のとらえ方、ものの量感など、その立体的描写は見事である。そして、オールズバーグの絵の魅力は、彫刻家としての目で見て描いたモノクロの作品ほど、よく表れている。しかし、彼の絵本で着色された作品は色彩の鮮やかに欠け、モ

ノクロの絵本に比べて、全体的にぼんやりした感じがする。色の使い方がさほど巧くはないからである。オールズバーグの場合、彫刻家としての特質から、むしろモノクロの絵本に、その良さが表れているといえよう。

一方、佐藤忠良の色彩感覚は際立ってすぐれている。彼は若いころ、画家になることを志していたというから、かなり絵画の修練を積んだに違いない。佐藤は彫刻家であるが、色彩に関する感性も豊かである。そして、こうした美に対する感覚は天性のものであると思われ、その色彩の用い方の巧さが、絵本作家としても十分に発揮されたのである。

この絵本の色合いの特徴は、原色ではなく、やや控えめな色合いを用いている点であろう。表紙（図２, 本論文 72 ページ）の、子どもたちの着物の色は左から緑色（たろう）、紫色（さぶろう）、黄土色（じろう）であるが、控えめな色であるにもかかわらず大変美しく響き合い、また背景の秋の黄葉した木々の色合いとも心地よく釣り合っている。末っ子の着物は紫であるが、鳥に行き先を聞く場面などの同系色の紫色と、木々の黄色、ならなしの鮮やかなオレンジ色（補色）、刀の鞘のオレンジ色（補色）、そして、鳥の巣の藤色とも美しく響き合っている。最後のページ（図３）は、夕暮れ時であるが、オレンジ色に暮れていく空、一方、大地は淡く薄青で描いてあり、天と地の微妙な色合いが何とも美しい。

（最後の見開きページ　図３）

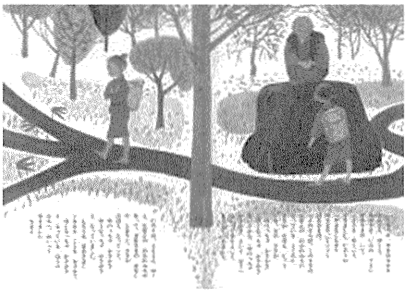


（最初の見開きページ　図４）

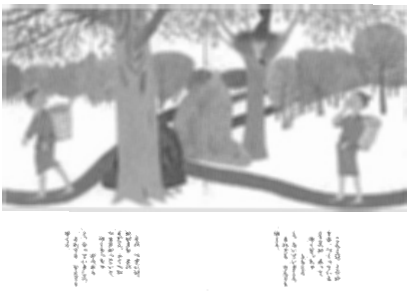
不思議な魅力の第２として、構図の巧さが挙げられる。当時の「こどものとも」は、まだ縦長の絵本であり、その形態上、人を横に動かすのは難しかった。後の『おおきなかぶ』は横長の絵本であり、見開きにすると、構図が広々と横に広がり、

おじいさん、おばあさん、孫娘、犬、猫、ねずみが協力して、かぶをひっぱる場面が巧みに描かれている。

人を横に動かすには、本来、横長の絵本のほうが便利である。「やまなしもぎ」は、子どもたちが出かけていく話であるが、しかし、絵本がまだ縦長の時代であるので、構図に制約があった。しかし、佐藤はその制限の中で、実に巧みに描いている。例えば、第１場面（最初の見開きページ　図４）で、たろうは、見開きの左ページの中央に描かれ、一方、病気の母親とじろう、さぶろうは右ページに小さく描かれ、縦長の狭い空間であるにもかかわらず、距離感を出している。そう感じさせるために、両者の間に木を描き、左右の空間を断ち、また木の上部も断ち落し、横へ広がる感覚を与えている。



（図５）



（図６）

同じように、次の場面（図５）でも、ページののど（中央）の部分に木を描き、左右のページが違う場面であることを示している。同じ見開きに、同じ人物（たろう）がいて、一見異時同図のように感じてしまう場面であるが、１本の木を境に、左右のページが違う場面（時間・空間が違う）であることを巧みに示している。しかしながら、両ページがつながっていることは、茶色で描いた道ではっきり示し、たろうが、同じ道を歩いていることがわかるように表示してある。そして、左ページのたろうは、別れ道を前にして、腕を組んで思案し、読者に次ページを開かせる。

次の見開きページには、鳥とのやり取り、ふくべとのやり取りの場面（図６）があり、図のように、場面は２本の木で３つの場に区切られている。たろうと鳥

の場面では、

　こんどは、とりが
すを　つくっている
ところが　あって、
　ゆくなっちゃ
　　とんとん
と、ないていました。
　それでも　なんでも
ゆくと、

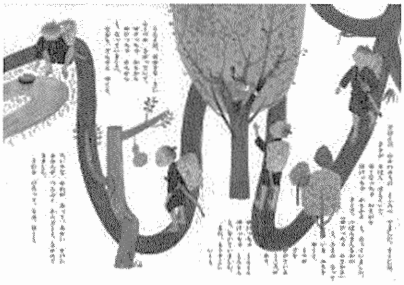
と読ませ、道は一度大きく右後ろに後退し、木々の間に見え隠れし、またそこから左ページの方に出てくる。そして、木の後ろを通って、左ページの端まで引かれている。そして文章には以下のように書かれて、

　その　つぎには、
おおきな　きの
えだに、ふくべが
つるさがっていて、
　ゆくなっちゃ
　　がらがら
と、なっていました。
　それでも　なんでも
ゆくと、

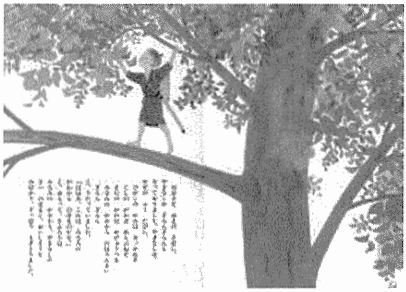
と読ませ、次ページを開かせるのである。こうして、狭い縦長の構図を巧みに使用して、工夫ある構図を作っているのである。

さらに、さぶろうが鳥とやり取りする場面、ふくべとやり取りをする場面、小さい川で赤い欠け椀を拾う場面は、見開きページ１場面（図７）で描いている。ここでは道を上下にくねらせて、さぶろうを４体登場させ、しかもここでは異時

同図を適切に使い、時間の流れ、空間の変化をおもしろい配置で描いている。そして、「なお、いくと」でページを開かせると、見開きページの右ページに、大きな木の幹が上下を断ち落して描いてあり、左ページではさぶろうが枝の上を歩きながら、梨をもいでいる。この場面（図８）では、見開きの横の広さを思う存分使い、木の大きさを描き上げている。背景が白で、その余白も広さを感じさせるのである。



（図７）



（図８）

次の見開きページでは、さぶろうが沼の主に見つかる場面（右ページ）、主をやっつける場面（左ページ）を、見開きページの中央に木の幹を描き、左右のページに分けて描いている。（図９）右ページではさぶろうが右向きで、上から下に魔物を睨み、左ページではさぶろうが左向きに飛び降り、主の身体を刀で切り下ろしている。同じ見開きページを横に広く見せるため、下部のテキストの部分を黄色に塗りつぶして、場面を横に広く感じさせているのである。

最後に、表紙と裏表紙を見てみよう。表紙（図２）は、３人兄弟がそろって収穫物を背負って帰る場面である。左がたろう、右がじろう、真ん中がさぶろうである。３人は収穫した、かなりの重量のある梨を背負っている。その分、いくぶん前かがみの姿勢で歩き、重さの伝わる描写である。ものを描く際、よく観察をする佐藤ならではの、人体の動きを上手に描いた絵である。しかも、３人とも前向きでは単純になるので、左端のたろうには、後ろを振り向かせ、３人の視線の方向に変化をもたせることで、この表紙に楽しげなやり取りを感じさせている。

（図９）

（図 10）

裏表紙は、さぶろうが助け出した兄たちを介抱している場面（図 10）である。右に解説文を入れる制約があるので、佐藤は狭い空間に、上、中、下と子どもたちを配している。読者の視線は右の文章を上から下に読ませる上下の視線の動きに合わせ、３人の配置をＳ字型にして、上から下に見るようにしている。読者はさぶろう、たろう、じろう、と順々に見て、さらにじろうの下におかれた籠を見るように動く。この部分もＳ字型に配置してあり、上手な配置である。この絵から連想できる昔話は、グリム童話の「おおかみと七ひきのこやぎ」、「赤ずきん」などである。オオカミという恐ろしい魔物に、１度ぺろりと飲み込まれた人が、腹を割いて出してもらう場面である。佐藤の、この絵も、魔物から出してもらった直後の、まだ意識もはっきりしない、長男たろうと次男じろう、そして、それを介護する末っ子さぶろうの様子を描いている。そして、上２人の子どもの籠には、当然、梨は入っていない。その後、回復したたろうもじろうもたくさん梨をもいで、３人そろって元気に家路を急ぐ様子が表紙には描かれている。これらが、佐藤が考え、意図的に描いた表紙、裏表紙である。

以上、この絵本のイラストレーションの巧さを述べたが、絵本『やまなしもぎ』は名作中の名作であるといえよう。もちろん、テキストを書いたのは平野 直であり、その見事な文章にイラストレーションを付けたのが、佐藤忠良であり、両者を合わせた立役者は、編集者、松居 直である。こうした名作が積み重ねられ、

昔話絵本は「こどものとも」シリーズの重要な位置を占めていくことになった。この後、佐藤は『おおきなかぶ』『ゆきむすめ』を描き、やがてその数年後に、国際アンデルセン画家賞を受賞することになる赤羽末吉が登場する。(『かさじぞう』こどものとも 58 号など（1961 年 1 月号)）こうして佐藤の仕事は、「こどものとも」の昔話絵本の基礎を作ったといってよかろう。佐藤なくして昔話絵本は語れない。

## おわりに

この論考では、1 人の絵本作家誕生の背景にまつわる事実を調査した結果を紹介して、その個人的な経緯と作品の内容に深い関係があったであろうことを記した。佐藤忠良は貧しい生い立ちから芸術家を志し、30 代で立派な作品を制作するまでになった。しかし、当時としては避けることができない召集令状を受け、彼は第 2 次世界大戦の激戦地に駆り出された。戦地では明日をもわからぬ命がけの負け戦に従軍させられ、戦後はシベリアでの抑留生活を強いられ、しかし生き長らえて生還した。その後、彼は彫刻家として立派な作品を残すが、人生半ば（40 代後半）にして、絵本を描くようになった。その理由として、愛する母親の死と、自分と弟の抑留体験があったと思われる。その体験がどんなに忌わしく辛いものであったか、それは経験した者にしかわからないことであろう。そして、魔物を退治する物語、さらに彼は最愛の母の死と子どもを取られた母親の思いを、「やまなしもぎ」という昔話に、精魂込めて描き込んだと思われる。そういう観点からいえば、この作品は、戦争という恐ろしい出来事を、魔物を倒すように葬り去るものであり、さらに亡き母への鎮魂の歌であったといえよう。そして、この作品が彼の作品群の基となり、続けてロシアを舞台とした昔話絵本が出版されたのであった。

最後に、佐藤が芸術家として真摯に生きたことを示す逸話を紹介したい。画家で、同じように絵本を手がけている安野光雅は佐藤について以下のように記している。安野と佐藤は何度か対談をしているが、ある時、2 人は一緒にロシアを訪れている。その旅の途上で、佐藤はロシアのテレビ局の人にインタビューを受けたそうである。「シベリアに抑留されていたと聞きましたが、さぞ大変だったの

ではないでしょうか」と尋ねられ、佐藤は以下のように答えたそうである。「彫刻家になる苦労を思えば、あんなことはなんでもないですよ」安野光雅は、このことばを聞いて襟を正したと記している。芸術家になること、そして、芸術家として生きることは、大変な人生を歩むということである。佐藤忠良は、今年３月に98歳で天に召された（老衰）。すばらしい彫刻、また絵本を残して下ったことを、深く感謝し、そして、心からご冥福を祈りたい。

## 註

1　「こどものとも」の初期の号を制作した代表的な作家、翻訳者、再話者たちは、石井桃子、池田龍雄、内田莉莎子、大塚勇三、岡本良雄、岸田衿子、木島 始、君島久子、小出正吾、瀬田貞二、鈴木三重吉、寺村輝夫、中川李枝子、西内みなみ、野上 彰、浜田広介、平野 直、松居 直、松谷みよ子、松野正子、与田準一、渡辺茂男などである。
また代表的な画家は、赤羽末吉、秋野不矩、朝倉 攝、安野光雅、井上洋介、大田大八、小野かおる、大村（山脇）百合子、加古里子、佐藤忠良、瀬川康男、田島征三、長 新太、寺島竜一、得田之久、中谷千代子、中野弘隆、なかのまさたか、初山 滋、堀内誠一、丸木位里、村山知義、茂田井武、藪内正幸、山田三郎、山本忠敬、横内 襄などである。

2　松居 直　『松居 直自伝　軍国少年から児童文学の世界へ』（シリーズ・松居 直の世界Ⅰ）ミネルヴァ書房 2012年１月

3　佐藤忠良 1912 － 2011年、宮城県生れ。彫刻家。東京美術学校（現 東京藝術大学）彫刻科在学中に国画会展に初入選、国画会奨学賞受賞。1939年、新制作派協会（現 新制作協会）彫刻部創設に参加。1944年、招集されて旧満州（中国東北部）へ渡り、翌年、シベリアに抑留される。1948年、帰国。1960年、「群馬の人」などの彫刻が評価され、高村光太郎賞受賞。1974年、「帽子・あぐら」で芸術選奨文部大臣賞受賞。1981年、フランス国立ロダン美術館に招かれ、日本人として初めて個展を開催。1984年、ローマ・アカデミア・ディ・サンルカの日本人初の会員に推挙される。1990年、宮城県美術館に佐藤忠良記念館が開館。すぐれた素描にも定評がある

4　『佐藤忠良彫刻七十年の仕事』佐藤忠良　講談社 2008年
70年にわたる彫刻の足跡を集大成し、代表作百点が掲載されている。また、佐藤忠良記念館の調査した資料を基に、彫刻作品の総目録を収録し、佐藤芸術の全貌を後世に残すべく編纂されている。

5　『てんぐのかくれみの』６号（1956年９月号）、『うりひめとあまのじゃく』10号（1957年１月号）、『すねこ・たんぽこ』22号（1958年１月号）、『てんぐのこま』27号（1958年６月号）、『でてきておひさま』28号（1958年７月号）、『３びきのやぎのがらがらどん』38号（1959年５月号）、『７わのからす』41号（1959年８月号）

6　『すねこ・たんぽこ』第１集　平野 直編、未来社、1958年、279~282ページ

7　平野 直　1902年岩手県生まれ。民俗学に興味をもち、1933年ころから、昔話の採集、再話を始めている。主な著書に、この『すねこ・たんぽこ』や『岩手の伝説』（津軽書房）などがある。

8　アールネ・トンプソンのタイプ・インデックス（Aarne-Thompson type index , AT）。世界各地に伝わる昔話を、その類型ごとに収集・分類したものである。アンティ・アールネにより編纂され、スティス・トンプソンにより増補・改訂された。現在も、昔話の分類体系の標準として用いられている。

9　この英国の話は、昔、あるところに、年取った王がいて、その王が重病にかかり、その病気を治せるのは、遠い国にある金のりんごだけであったので、３人の兄弟たちが、

馬に乗って、そのりんごを探しに出かける話である。日本の「やまなしもぎ」などに比べれば、このイギリスの話は大変長い物語であるが、最後は末っ子がりんごを持ち帰り、父親が食べて、元気を取り戻し、幸せな結末で終わる。

10 クリス・ヴァン・オールズバーグ（Chris Van Allsburg, 1949 －） アメリカの彫刻家、絵本作家、代表作は『ジュマンジ』『急行「北極号」』。この２作で、コールデコット賞を受賞している。

11 『若き芸術家たちへ　ねがいは「普通」』佐藤忠良、安野光雅、文化出版局 2002 年（現在、中公文庫として再版されている。2011 年）